



西宮は文楽の源流「傀儡師」発祥の地といわれ、文楽と大変縁の深い町です。同時に西宮は全国有数の「酒どころ」でもあります。この「酒」と「文楽」という西宮を語るに欠かせない二つの要素を、造り酒屋において同時にお楽しみいただくというのが、「酒屋万来文楽」です。第17回目となる今回は、江戸時代に広く読まれていた『源平盛衰記』を平仮名にやさしく書き下ろしたという意味で作られた『ひらかな盛衰記』からその四段目、「神崎揚屋の段」を取り上げました。

『ひらかな盛衰記』は、源平合戦の中の、木曾義仲討伐から一の谷の合戦までを背景に、義仲の四天王の一人、樋口次郎兼光の忠節や梶原源太景季の出陣をめぐる物語を描いた作品です。そのなかから、宇治川の先陣争いに敗れて勘当の身となった恋人・梶原源太のために尽くす傾城・梅ヶ枝の献身を描いたのが「神崎揚屋の段」です。



傾城梅ヶ枝 吉田和生 梶原源太景季 吉田玉佳



太夫 竹本織太夫 三味線 鶴澤藤蔵 ツレ 鶴澤清鐘

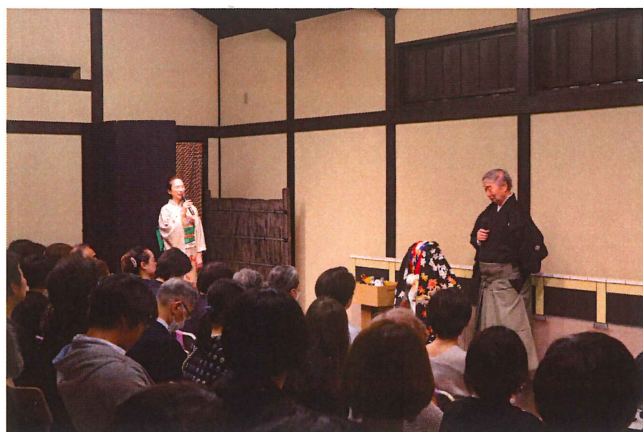
立兵庫のひときわ大きな髷に鼈甲の櫛笄、銀のかんざし、黒地の豪華な打ち掛けを纏った、堂々たる傾城姿の梅ヶ枝。この凛とした美しい姿が一変、恋する男故の懊悩の末、打ち掛けも脱ぎ捨て、身悶え髪振り乱し、庭の手水鉢を無間の鐘に見立てて柄杓で打とうとする様子は、女の一念が激しい気迫で迫り、見る者を圧倒します。







劇中様々な顔を見せる梅ヶ枝を遣うのは、このたび文化功労者に選出された吉田和生師です。なんとこのお役は初演とのこと。ご本人曰く「最初で最後の梅が枝」とのことでした。この一期一会の舞台を間近で存分にお楽しみいただきました。



文楽公演に続く後半の「文楽の手ほどき」では、再び吉田和生師にご登場いただき、師匠の吉田文雀師との出会い、師の教えなど、人形遣い一筋60年の軌跡についてお話をうかがいました。文雀師への深い感謝とともに、後進の育成と文楽の未来に心をくだく和生師の訥々とした語り口に、一同しみじみと聞き入っていました。